

登録有形文化財

# 畑田家住宅活用保存会年報

No.16 / 2017



## ＜畑田家住宅活用保存会 2017 年度行事予定＞

初夏の街歩き

2017 年 4 月 23 日（日）

「古代を楽しむ—ぶらり古墳巡り」

羽曳野市文化財保護課参事 吉澤則男

秋の一般公開と科学フォーラム

2017 年 11 月 12 日（日）

「脳と AI とゆらぎ」

大阪大学/情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター(CiNet)センター長

柳田敏雄

春の一般公開と第 21 回畑田塾

2018 年 3 月 18 日（日）

「自分探しの旅—科学、音楽、美術を通しての提言—」

大阪大学名誉教授 北山辰樹、声楽家

畑田弘美、画家

中村貞夫

初夏の一般公開とフォーラム

2018 年 5 月 20 日（日）

「木造住宅これまでとこれから」

建築家 石井智子

## 寸感

会長 中村貞夫

見ることは予見すること、とフランスの詩人は言っています。意味がよく分からないままに好きなフレーズです。ヘレン ケラーは幼少の時に失われた一見、聞こえる、話す—の3つの機能の内、1つ回復が許されるなら「聞こえる」を選びたいと言っています。日々見ることにかまけている私には想像を絶する選択です。

文明とは何か、人間とは何かを追い求めて、エジプト文明を生み出したナイル川の源流の地、ウガンダの取材の写生旅行を始めた時、夕暮れのひと気のない国道を一人の女性が頭に小さな包みを載せて歩いていました。前後、次の街まで数十キロあるところなので、同行のドライバーに、彼女はどこに行っているのか尋ねましたら、どこにも行っていない、どこから来たのかの問いに、どこからも来ていないとの答えです。食べ物は辺りに生えている植物を、飲み物は雨水などの水たまりだそうです。住む家もなく、うろろうろしているのです。チャーチルがアフリカの真珠と呼んだ風光明媚な国で、けた外れに想像を越えた光景に出会いました。ウガンダは教育に熱心な国で、町々の真新しい建物は小中学校の校舎で、学習用具を抱えた子供たちともよく出会いました。

羽曳野市郡戸の畑田家住宅の納屋での絵の制作もわからないことだらけですが、庭に出て眺める屋敷の景観は見飽きることがありません。

永年会長を務めてくださった畑田勇様が逝去されました。活用保存会の活動に積極的なご提言と方向を示していただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。畑田勇様のお宅は畑田家住宅の南側にあり、瀟洒な洋風建築で、屋上には太陽光発電の機器が設置されており、進歩的なお考えの方と拝察していました。活用保存会の発足の折には、当主の耕一氏と一緒にその屋上に上がらせていただいて、畑田家住宅の全景が撮影されました。その写真は主屋の玄関に飾られています。

本年度も皆様のお力添えのお蔭で種々の行事を活発に行うことができましたことをお礼申し上げます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

濃く うすく 時には見えず 二上山

## 平成 28 年度 事業報告

1. 初夏の一般公開と健康フォーラム 5月22日(日)  
「身体にやさしい健康体操」  
公益社団法人自彊術・指導員 白樫房子、畠山悦子
2. 秋の一般公開と歴史フォーラム 11月13日  
「世界遺産を目指す古市古墳群成立の歴史的背景」  
大阪大学文学研究科教授 福永伸哉
3. 春の一般公開と第20回畑田塾 3月19日  
「音楽の世界における日本と西洋の交わり」  
琴 菊佳裕純子、ピアノ 吉山輝、歌唱 畑田弘美
4. 出版  
「双方向授業が拓く日本の教育—アクティブ・ラーニングへの期待」  
大阪公立大学共同出版会 (OMUP)  
畑田耕一 編著
5. 畑田家当主 畑田耕一による教育奉仕活動等  
4月27日 西宮市立西宮高等学校  
6月23日 兵庫県立豊岡高等学校  
12月13日 豊中市立熊野田小学校  
2月13日 兵庫県立豊岡高等学校

## 役員

会長	中村貞夫
副会長	畑田拓男
事務局長	畑田耕一
幹事	石井智子、奥田 寛、笠井敏光、 北山辰樹、渋谷 亘、畑田直樹、 畑田達也、畑田弘美、矢野富美子
会計	畑田庸雄
会計監査	澤田秀雄、塚本昭光

## 新正会員

奥野幸子、奥山雅規、樋上恵美子、榊田定子、森椚正則、矢口正登、吉崎和幸

## 新特別会員

三軒輝子、白樫房子、畠山悦子、福永伸哉、吉本純子

現在の会員数 277名

現在の特別会員数 62名

<表紙写真>左の棧瓦葺きは米蔵の屋根、右の本瓦葺きは東蔵の屋根です。米蔵は蔵の中で最も上等な作りになっており、屋根は二重に作られ、室内は調湿の為かと思われる上質な板が貼られていて、お米を劣化させずに保存することについて、よく考えられています。いかにお米を大切にしていたかということが伺われ、玄米は完全食でこれだけでも生きていくことができるという話を思い出しました。東蔵は2階建の道具蔵で、この本瓦は創建当初のものである可能性が高いそうです。右の写真は米蔵の鬼瓦ですが、鬼瓦の選定技術者である故小林章男さんは、「造瓦は百済から伝わったと言われているが、韓国にも中国にも鬼瓦がないのは、鬼を忌み嫌っていて、日本人のように鬼を自由に意識していなかったのではないか」という意味のことを述べておられます。また「歯ができた室町時代の鬼瓦は古代日本人のかみ合わせのように上下垂直で江戸時代になると上歯が外へ出て外歯造りが多くなるのは、柔らかいものを食べるようになって外歯になった日本人の歯の変化をとらえている」とあります。おもしろいですね。(石井智子)



〈本年の行事に参加していただいた方々からの感想文〉

春の一般公開と第19回畑田塾 2016年3月27日(日)

「あなたの未来は変えられますかー遺伝子と運命ー」

群馬大学生体調節研究所教授 畑田出穂

◆畑田耕一先生から「子どもを対象にした塾だから、理科が苦手でも大丈夫です」とお誘いをいただき、第19回畑田塾「遺伝子と環境ーあなたの未来を変えてみませんか」に参加しました。講師は、畑田先生のご長男である群馬大学生体調節研究所教授、畑田出穂先生です。阪大の北山先生が司会を務められ、第1部は出穂先生のオリジナル曲の動画からはじまりました。桜の花びらに乗った動物の画像がとても可愛く、出穂先生の歌声も澄んだとても心地よいものでした。ところがその後は、突然学校の理科の授業のようになりました。塩基やゲノム、メチル化など難しい言葉が並びます。出穂先生は、できるだけ参加者が分かりやすいようにと言葉を選んで話をしてくださっていましたが、私はDNA(遺伝子)の二重らせん構造の画像を見ただけでじんましんがでそうになりました。ただ、DNAにはそれぞれの役割を表わすスイッチがあることは、知りませんでした。また、出穂先生は、そのDNAのスイッチ(エピジェネティクス)の研究者だということがわかりました。

第2部は、第1部とは違い、マウスやミツバチ、猫など事例がたくさんでていてとても分かりやすくなりました。それらの例から、クローンは同じ個体ができないこと、祖父のネズミの条件反射が孫の代まで影響を与えることなど、驚くような話が次々飛び出しました。さらに出穂先生は、「これらが正しいかどうかはこれから研究を重ねていかなければならない」といいながら、人間の出産や子育てに関するエピジェネティクスに関する最新の論文事例も紹介してくださいました。

それぞれの部の最後に質問タイムが設定されていたので、私は第1部では小児がんの遺伝子について、第2部では隔世遺伝について質問しました。他の方も臓器細胞のスイッチやがんの手術、祖父と孫の喫煙などの生活習慣について質問され、とても活発な素晴らしい講義になりました。

最後に畑田耕一先生から修了証と、手回しオルゴールとバッチの記念品を戴きました。オルゴールの夕焼け小焼けのメロディを聴きながら、過去に理科の授業で質問できたことなど今まで一度もなかったことを思い出しました。ひょっとしたらこの畑田塾で「理科が好きになる」という遺伝子のスイッチがONになったのかもしれませんが(笑)。有意義な時間をありがとうございました。(大阪狭山市 三上香子)

◆本来人の運命を決定してしまうのは遺伝子、“あなたの未来を変えてみませんか”の設問に想像が広がります。昨年春にいただいた年報予定を見て楽しみにしていました。講演をお聴きしてエピジェネティックセラピーの研究が、この分野を開拓していることが理解できました。

まず復習とおっしゃって、凡そ3万個ある遺伝子DNAからRNA、そしてアミノ酸、タンパク質合成への流れ、さらに遺伝子と環境、ゲノムとエピゲノムの関係などを解りやすく教えていただきました。私は、遺伝子については、ごく一般的な知識しかありませんが、新しい研究がよく理解できました。

そして蜜蜂のロイヤルゼリー(物質)、ラットの育児放棄(精神)について、食物とストレス耐性遺伝子のオン・オフによる結果が遺伝子のレベルで解明されていて、前者は遺伝子操作によってロイヤルゼリーなしで全てが女王蜂になる。これらのお話に、なぜか昨今解決できずに連鎖する社会格差の問題を連想してしまいました。

また昆虫、動物だけでなく人でも祖父の過食行動が孫に遺伝子のレベルで成人病として伝達されることが疫学調査によって証明されています。遺伝子活性のスイッチのオン・オフはその可逆性も含めて解析されているといいますが、個々の症状の改善にまで結びついているのでしょうか、この種の調査研究はその正否を別にして数多く行われているとお話になりました。

まとめで、塾長の畑田先生が疫学調査の精度に言及され、調査結果のバラツキなどについてお話になったのは大変示唆に富む提言だったと思います。私たちは、解るところだけ解りたいように理解して学問からの提言を全て「100%」のものとして信じてしまっているようです。反省させられました。

今、人の行動を遺伝子レベルまで研究して人の未来をどう変え得るのか、エピジェネティックセラピーのこれからの思いを馳せています。期待通り、具体的に大変興味あるお話を沢山いただき、ありがとうございました。

(尼崎市 寺脇義男)

◆遺伝子の話ということで楽しみにしていた。お話をして下さる方は畑田出穂教授、お名前から、参加するまで女性かなと勝手に思っていた。当日、当主畑田耕一先生の御長男と聞く。感じのいい名前だなと思うとともに出生時、両親がこの名前を付けたシーンや思いを想像し、嬉しい気持ちになった。そして今日、家族・親族をあげてこのような場を社会に提供されるのも、今から学習する遺伝子に関係するのかもしれない。

人間の身体は60兆個の細胞でできている。その細胞一つ一つにすべての情報を書き込んだ遺伝子が内包されている。最近はこの遺伝子情報をすべて読み解くことができるようになった。自分の遺伝子を調べる事も難しいことではなくなった。隣の人と自分の遺伝子の違いは0.1%、世界の人口70億、たったこれだけしか違わないがしかしすべて違う。このような話から始まって、後半遺伝子研究最先端のホットな話題が提供された。中でも私の心に残ったことは

- ① 遺伝子が同じでもそのあらわれ方は同じではない。これは一卵性双生児を観察すればわかる。非常によく似ているが違う。年齢を重ねるとその違いは大きくなる。
- ② 生まれてから後、獲得した形質も遺伝することが実験で確かめられている。これはお進歩の定説をも見直す可能性を秘めている。

この二つのことは何を意味するのか。遺伝子記号そのものが表す情報だけでなく、それぞれの遺伝子にスイッチがついていて、それも固定的ではなく必要な時にONになったりOFFになったりしているというのである。教授の所属する研究所はこのスイッチの研究を目的としている。サブテーマ「あなたの未来を変えてみませんか」の持つ意味がこれでわかる。つまり広い意味での環境である私たちのこれからの生き方が遺伝子の発現パターンを変え、子孫を含めた未来を変えていくことができますよということだ。これは「累代教育」の可能性や、「人類の進化」に希望をもたらすメッセージと言っていいたいだろう。「後世への最大遺産はまさにあなたの生き方である」(八尾市 神野武男)

◆一卵性双生児の見分けが付け難いのは、同じ遺伝子を持っているからと判っているが、ではなぜ違う形質が現れるのか?大きな疑問であった。同じ遺伝子でもその発現にオン、オフがあるという。そして、このオン、オフには可逆性があるらしい。一つの形質を表すのに、多数の遺伝子が働いており、個々の遺伝子のオン、オフが複雑に関与している。双子の成長につれ、外見だけでなく、性格、嗜好に違いが現れる。それは、育つ環境の違いが発現のオン、オフに影響を与えているとされる。では、乳児の段階で、既に差異が生じているのはなぜなのか。同じ遺伝子を持つ双子は、母親の胎内と云う同じ環境、同じ栄養条件なのだから、誕生時にはオン、オフの状態も同じであるはずではないのか?オン、オフを変える刺激とはどのようなものであろうか?また新たな疑問が生まれた。(放送大学大阪学習センター水の会 近藤芳史)

◆貴重な有形文化財「畑田家」のお屋敷での講義、塾生は一

般主婦の方やご隠居様など、昔の寺子屋を体験したように感じました。講義内容は素人でも分かり易く工夫されていたように思います。まず遺伝子の基本的な説明から現場の最前線テクノロジーまで興味深く受講させて頂きました。年齢的に手遅れかもしれませんが、自分の周りの環境を整えることで遺伝子スイッチがオン・オフされることを忘れず、明るい老後を過ごしたいと考えます。受講修了書、バッジそして可愛いオルゴールまで頂戴して、お陰様でまた新しい感動を体験させて頂きました。(八尾市 堀 正博)

◆住宅の一般公開の後、急遽ではありましたが畑田塾に参加させて頂きました。テーマ「遺伝子と環境」に関心はあるものの、難しいのではないかと心配していましたが、分かりやすく説明して下さい、気が付けば3時間が経過していました。最近の研究を、その分野でご活躍の先生に間近で教えて頂けて感激しました。そして今回、若い人達と共に参加できなかったことが残念でした。本物の人、本物の家に逢えてよかったです。記念に頂いたオルゴールの音色を、脳幹に響かせて脳の活性化を致します。(藤井寺市 尾鍋真理子)

◆古い木造住宅の構造や造作に興味があり、参加させて頂きました。畑田家は昔ながらの「趣き」を良く残されており、日本民家の原風景をじっくり観察する事が出来ました。最近、古民家の外壁に金属板などを貼って補修している例を見かける事が多いので、畑田家における長屋門、米蔵、漆喰塀など、当時と同じ材料で維持されている住人の御苦労には敬意を表します。黒く燦けた一尺もあるような大黒柱と丸太梁との構成は、庄屋屋敷らしい質実剛健な力強さを持ち、それらの構造材と漆喰壁との対比からは古民家特有の美しさを感じる事が出来ました。また敷居と鴨居の溝の数の違いから明治20年の再建の際に、古材が使われた名残であるとの解説がありました。樹齢500年の木材は500年持つと云われますが、当時の大工さんのモノを大事にする心に思いを寄せました。

他にも米蔵へのネズミ防止の工夫や牛小屋と厩との位置関係の話など、面白く解説して頂きました。午後のフォーラムには都合で参加できませんでしたが、機会があればまた参加したいと思います。良い学びの時間をありがとうございました。(藤井寺市 尾鍋裕美)

初夏の一般公開と健康フォーラム 2016年5月22日(日)

「身体にやさしい健康体操」

公益社団法人自彊術・指導員 白樫房子、畠山悦子

五月晴れの天候にも恵まれ、参加者全員で身体を動かす「健康フォーラム」が行われました。



健康意識の高まる昨今、色々な健康体操がある中、今回は「自彊術」を取り上げ体現するフォーラムとなりました。指導員には白樫房子氏、畠山悦子氏をお迎えしました。

大正5年(1916)、中井房五郎氏によって創案された日本最初の健康体操で、2016年に100周年を迎えます。その名前の由来は、2600年前の中国古典『易経』の一節「天行健君子以自彊不息」からとっており、「天の運行はすこやかである。人間は健康を保つためには、毎日自ら勉めて休んではならない」という意味です。

身体全体は240もの可動性関節で成り立っており、それを31の動作で全身を細部まで動かし、器具などは用いず畳一帖の空間があればどこでもできます。指導者による鮮やかなデモンストレーションの後、独自の呼吸法の号令に合わせて実践となりました。普段動かしにくい筋肉を簡単な動作で刺激したり、手や足をこすって血行をよくしたりして笑顔の体操となりました。これなら続けやすいというお声もあり、指導員の畠山氏からは、「是非自分の健康をそれぞれが意識をもってこの自彊術を実践して健康を維持してほしい」とお話しされました。(羽曳野市 畑田弘美)

◆今回の畑田塾では自彊術の講座を受講しました。講座では白樫房子先生、畠山悦子先生が講師として自彊術についてお話しくださいました。前半は自彊術が中井房五郎さんにより、大正5年に作られたその時から現在に至るまでの歴史と、自彊術のあり方をわかりやすく説明してくださいました。後半で自彊術普及会の講師の先生と共に、実際に実況術を体験しました。自らの手や体を使い、全身をほぐすことで、自然と体が温かくなり、頭の上から足の先までが軽くなりました。私は今まで体が重く感じたり、風邪をひいたときには、すぐに病院に行き薬を処方していただいていたのですが、この自彊術を毎日することにより、体調不良を未然に防ぐことができるのではないかと感じました。これこそまさに本当の手当てというものでは無いかと感じた1日でした。(片木彩賀)

◆今回のフォーラムは少し異色であった。健康体操「自彊術」、一度は耳にしたようにも思うがその字からして難しい。彊の異体字が強ということであるからおよそのイメージは湧く。ラジオ体操のもとになったと聞くから歴史がありそうだ。いただいた資料を見ると100年前に創案されたとのこと。ちょっと地味だなあと感じないでもないが、実際に体操をしてみると身体が喜んでいるのがわかる。少しの動きにもかかわらず結構身体に効いている。60歳を超えて定期的な身体のメンテナンスを欲していただけに、この縁を生かして一歩踏み出してみ

ようと思う。「いつとはなしにお腹の贅肉がとれました」、「いつとはなしに脚の痛みが取れました」「いつとはなしに」は、ほんまもんの証かも知れない。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 神野武男)

◆ご指導いただいた自彊術はきびきびした号令やハーッ!という力強い呼吸、静かなようでダイナミックな動きが目の前で演じられ迫力がありました。カッコイイと感じました。頭のとっぺんから顔中のツボの刺激やマッサージは気持ちよく、体操の強に対してやし系にほっと気分もゆるみました。気さくな指導者たちや参加者が発する満ち足りた空気がとてもよかったです。私は61歳で近所のジムでヨガを習っていますが自彊術と重なる部分があり嬉しいです。

(八尾市在住 頼政敏子)

◆私と母で、畑田家住宅に、行っておどろきました。まず始めに、オルゴールがありました。そこでは、ふつうに見るオルゴールではなく、いすにすわると、音がなるオルゴールや、スイスでできた、かわいいお人形さんを、くるくる回す、オルゴールと、うちわで回していく、オルゴールがあつてびっくりしました。私も、スイスでできたお人形さんの、オルゴールは、初めて見たのでびっくりしました。そして、お家の大きさと昔のすてきなお部屋に、びっくりしました。私のお家がとても小さいと、びっくりしました。

その後、けんこう体そうの自きょうじゅつという体そうをしました。そこでもとてもびっくりしました。なぜなら、私はバレエを習っていて、とても似ている所があります。せすじを伸ばすこと、せ骨や、あばら骨の使い方も一緒でとてもおどろきました。これからも、この自きょうじゅつという体そうを続けて先生のように元気で、バレエも上手になりたいと思いました。(小学校四年 岡田桜子)

秋の一般公開と歴史フォーラム 2016年11月13(日)

「世界遺産を目指す古市古墳群成立の歴史背景」

大阪大学文学研究科教授 福永伸哉

◆地元のボランティアガイド結成に参画したことをきっかけに「古代史の森」に足を踏み入れ、御多分にもれずその深い霧に包まれて自身の立ち位置すら覚束ない状態になっている現状です。福永先生のお話を聞いて、その霧の向こうから幾条かの光が差し込んできたような気がします。普段、ガイドをしている「古市古墳群」を中心に、ご専門の考古学的見地から最新の考察を伺うことができました。光が差して霧が晴れた部分とまだ霧に包まれている部分を整理してみました。

**箸墓古墳の被葬者：**「魏志倭人伝」の記述からその存在と没年を特定し、箸墓古墳出土の布留式土器から古墳の築造年代を240年～260年として、邪馬台国の中心人物、卑弥呼が被葬者であることの可能性について触れられました。まったくの素人的発想ですが、学術調査として古墳への立ち入りが許可され、決め手となる「親魏倭王」の金印と「三角縁神獣鏡」が副葬品として発掘され、且つその正統性が証明されれば、邪馬台国論争、近畿説 vs 九州説に決着をつけることができるのかな、と思いました。

**津堂城山古墳の成立：**この古墳から出土の土師器を基に、370年～380年頃築造と比定されました。古市古墳群の中で、最古と言われる前方後円墳ですが、箸墓古墳群の成立からおよそ100年以上経って、ヤマトの王権が大和から河内に移行したことを意味するとの説に納得できます。古代史上、“空白の四世紀”といわれる、4C中葉、河内王権の初代盟主となったのは誰なのか？応神天皇を実在の人物とするなら、津堂城山古墳の被葬者は応神であっても不思議ではないように思います。現在この古墳は先生ご指摘のように、墳丘墓部分のみ“陵墓参考地”として周囲に金網が張り巡らされ、立ち入りが許されていません。不明の点を解明するための学術調査が許されても良いのではないかと、思っています。

一方、私は、日本古代史上、最大の英雄、「ヤマトタケル」に魅せられて、アマチュアの立場で研究を続けています。倭建（ヤマトタケル）は、伊吹山の神と戦って傷つき伊勢能褒野で亡くなり、その後、“シロチドリ”と化して、西の空に飛び立ち河内の志幾（しき）に舞い降りた。その地に陵を造った”の記述（「古事記」）があり、この津堂城山に埋葬されている人物こそ、倭建（もしくは、ヤマトタケルに擬せられている人物の一人）ではないだろうか、言い換えると、この津堂城山古墳こそ、倭建の陵ではないだろうか、と考えているのです。

**誉田御廟山古墳（応神天皇陵）：**この古墳の陪塚から出土した、「金銅製透かし鞍」（誉田八幡宮所蔵、国宝）と“赤馬伝説”に彩られ「騎馬」と「鉄器」に象徴される河内王権初代の大王とされるが、その出生からしてあまりにも謎の多い大王です。母親とされる神功皇后の朝鮮半島出征にも絡んで、もともと、朝鮮半島にあった加耶国内の小国“倭”のリーダーで、渡来し、鉄製武器と騎馬軍団で、河内に攻め上ってきたという説も根強く残っています。その説を裏付けるかのごとく、陪塚とされる周囲の古墳（野中古墳、西墓山古墳、ア

リ山古墳、大鳥塚古墳など）から夥しい鉄器（武器、農耕具）が発見されています。これだけの大王でありながら、いまだに王宮（跡）の所在も不明です。応神天皇とは実在の人物なのか、それとも神話に属する神なのか、興味は尽きません。

世界文化遺産：古墳群をめぐっては現在、堺、藤井寺、羽曳野の三市が世界遺産登録を目指して活動しています。百舌鳥古墳群と古市古墳群を一体的に登録しようとするのですから双方を結ぶ交通路の必要性は、早くから指摘されていました。両地域を結ぶシャトルバスの整備は喫緊の課題ですが、日本最古の官道といわれている竹内（たけのうち）街道を復活させるのは、どうでしょう。できるだけ、古代の街道に近づけその沿道には、茶店や旅籠（民宿）などをしつらえ、両古墳群をゆっくり歩いて、楽しんでいただく、また、両地域に残る古民家や、農耕文化にも触れてもらえるようにすれば、古墳群のある地域だけでなく、両古墳を結ぶ街道も楽しめる空間になるのではと考えています。（増元克二）

◆生駒に長く住まっていて、明日香のキトラ古墳をはじめ大和の古墳はあちこち見て回りましたが、古市古墳群には全く思いが到りませんでした。今日、福永先生のお話を聞いて、ハッとしました。新しい目が開かれた思いです。応神天皇陵古墳のすごい大きさもさることながら、これが、周りの人々みんなの思いを込めて作られたものであるということに大いなる感動を覚えました。また、藤井寺の野中古墳からは、甲冑をはじめとする鉄製の武器・武具が出土したというお話でしたが、鉄の精錬技術の無い時代に作られた古墳からこのようなものが出土するのは、製品そのものが朝鮮半島から持ち込まれたのか、あるいは輸入品の鉄板から鍛冶工房で加工されたのか、疑問に思いつつも、質問する勇気が起こりませんでした。また、戦の無い平和な時代に、甲冑などの武器・武具が何故必要だったのかな、と思いつつお話を聞いておりました。王の象徴だったのでしょか。（生駒市 吉田睦子）

◆ 私自身は団塊の世代で、日本の歴史については、史実としては倭の女王卑弥呼を知っているぐらいで、飛鳥時代以前については、天照大神（アマテラスオオミカミ）、大国主命（オオクニヌシノミコト）、八岐大蛇（ヤマタノオロチ）などの神話・伝説しか知りませんでした。今日のお話を聞いて、古墳時代が歴史として明らかになりつつあることを理解しました。

文字が普及していない時代では、残された遺跡・遺物でしか物事の判断が出来ないので、その価値は大変重要であり、百舌鳥、古市古墳群が東アジアとの交流を示すものであるな

らば、日本だけでなく、東アジアの文明史上からみても、貴重な世界的価値を持つものと考えられます。

百舌鳥、古市古墳群の東アジア古墳群の中での位置づけも重要です。発展形としての前方後円墳群を含む多様な古墳群が狭い地域に集中して残されていることが、最大の価値だと思いました。(夏井重行)

◆ 講演会場の畑田住宅を訪れたとき、湧き出たのは、“ああ 懐かしい”という思い。30年ほど前に取り壊した実家と同じ匂いがした。そして、畳の広間で座蒲団に座り、講師のお話を聞かせて頂く。私の好きな古代史がテーマで、興味は尽きない。

戦前まで、圧倒的な人口構成を占めていた農家の住宅は、畑田宅ほどではないにしても広い座敷があり、襖を外せば大人数が集える大広間となった。そこでは結婚式や葬式をはじめ、近所の寄り合いなどがおこなわれ、生活の場であるとともに、多くの人々が集う交流の場であったであろう。

現在、青少年の引きこもりは160万人以上。稀に外出する程度のケース(準引きこもり)まで含めると300万人以上存在するという(NHK福祉ネットワーク2005年度調査)。私の若い頃には引きこもりという言葉はなかったはず。戦後の核家族化、住宅の洋室・個室化がその背景にあったように思えてならない。

豊かで便利な時代になり、一人でも何不自由なく生きられる世になった。しかし、そこには孤独感が漂い、笑いが見え

ない。人はひとりでは生きられない。人との付き合いは煩わしいこともあるが、それを飲み込んでこそ人は豊かな人生を送れるのだろう。他人は自分とは異なるからこそ面白い。

戦前までの多くの日本人は、今よりもずっと貧しかったけれど、濃い人間関係を築きながら、それなりに満たされた人生を送っていたのではなかろうか。畑田住宅は、そんなことを改めて感じさせてくれる古民家であった。

(羽曳野市 軽里 田中 勉)

◆古墳群のお話をなさるとのことで当日が待ち遠しくてなりませんでした。これらの古墳は、現在の我々の墓の大きさからは考えようもない大きな規模で、大王の墓を作り平和的権力を誇示しようとしたものでしょうか。古墳づくりでは多くの犠牲もあり、後に埴輪を作り古墳に入れたことなど、丁寧にお話をしていただきました。全体としては、少し硬く難しいお話でした。話の後の質問の時には、御陵の遺品が盗難に合う話もできました。これからも古墳調査でいろいろな発見があり、一刻でも早く世界遺産になれば良いと願っています。

(羽曳野市 畑田富子)

春の一般公開と第20回畑田塾 2017年3月19日(日)

「音楽の世界における日本と西洋の交わり」

琴 菊佳裕純子、ピアノ 吉山輝、歌唱 畑田弘美

この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。

## 木造日本家屋の同窓会会館

元関西大学工学部教授 浜中佐和子

私の母校の奈良女子大同窓会の一般社団法人佐保会(平成24年に同名の社団法人から移行)は、大学構内に会館(佐保会館、建坪面積561㎡、木造二階建)を持っています。この会館は昭和3(1928)年に建設、女性技能教育場に活用されていました。しかし、平成になった頃には事務室のある一階部分のみが使用され、二階は不要物の廃棄場になっていました。2003年、理事長になられた生駒節子様から「この会館をどうするか?」と思案され、取壊しなどの話も出始めました。その時、畑田家住宅活用保存会幹事の石井智子様から「有形文化財に登録して、大修理を行えば、活用出来る」との提案があり、理事会での話し合いで文化の発信基地としての活用計画が作られました。2005年8月末、この計画が同窓会総会に提案された時、大阪支部長の緒方淳子先生が強い賛意を示されました。当時、大阪支部の私達は、緒方先生に誘われて、畑田家での畑田塾などの催しに参加しており、庭のある日本家屋での講演会やコンサートでは「人の心も癒される」ことを体験していましたので、佐保会館も寄付が順調に集まり修理が出来ればと願いました。会館は2005年12月に登録有形文化財に登録され、翌年から修理が始まり、2007年2月に完工しました。間もなく活用が始められ、10年経った今も、平日は佐保塾として、太極拳(月4回)、万葉講座(月2回)、コーラス、書道(月1回)の各教室、土、日曜日は、コンサート(七夕、クリスマスは定期)や講演会会場などに使用されています。

同窓会には無関心だった私も修理された佐保会館に関心を持ち、同窓会の仕事も積極的に引受けました。今は、微力ながら、少しでも古い日本家屋の保存・活用に協力したいと思っています。

## 畑田耕一さんと私

澤田秀雄

畑田家八代目当主の耕一さんと私は共に1934年の生まれで、私は1月生まれ、早生まれなので学年は一年上です。1945年、大阪府南河内郡千代田国民学校6年生の時、空襲警報が出て帰宅する途中米軍戦闘機の機銃照射を受けました。みぞに隠れて逃れたのですが、耕一さんも同じような目にあったということで、二人の住まいが近かったことを考えると、ひょっとすると同じ飛行機だったのかもしれませんが。

1945年8月敗戦。翌年、堺中学に入学。府立三国ヶ丘高校を経て、1952年阪大理学部化学科に進み、1956年卒業後大日本セルロイド株式会社（現ダイセル化学工業）に入社しました。耕一さんも同じ阪大理学部化学科を経てダイセル化学に入社されました。

1961年笠井淑子との結婚に際し仲人をお願いした阪大工学部教授城憲三氏は父昌雄（阪大理学部教授）の友人で耕一さんの伯父です。その後、妹の美智子が耕一さんと結婚し、共に埼玉県入間郡大井村のダイセル化学中央研究所のアパートで生活することとなりました。ついでながら、ダイセルの堺工場と堺研究所は芝生の上にレンガ造りの美しい建物で、消えてしまったのは遺憾の極みです。重要文化財として保存出来ればよかったなと思っております。

畑田家のある羽曳野市郡戸と澤田家の大阪狭山市は狭山池を通してつながっています。この池は洪水を調節する治水ダムとして機能するとともに、周辺の農地の灌漑用にも利用され、狭山と郡戸は狭山水路で結ばれているのです。この池は1400年前につくられたわが国最古のダム式ため池で、古事記や日本書紀にもその名が登場する風光明媚な池で、枕草子に「さ山の池」という記述が登場し、歌や絵の題材にもなってきました。昭和16年に大阪府の史跡・名勝第1号に指定され、平成27年3月10日に国の史跡に指定されています。また、出土品の狭山池出土木樋と重源狭山池改修碑は重要文化財です。

文化財ということでは、ダイセルの堺アパートの近くを走る南海本線の浜寺公園駅と諏訪ノ森西駅舎は国の登録文化財です。羽曳野の畑田家も国の登録文化財、この建物を活用して「人は家をつくり、家は人をつくる」の考えのもと、小・中・高校生を対象とする畑田塾をはじめ、いろいろな分野の専門家の講演と1時間をはるかに超える活発な意見交換が本当に精力的に行われています。畑田家住宅活用保存会の今後の一層の発展と地域から世界への貢献を期待しております。

狭山池は自宅に近く天気の良い日に必ず訪れます。池の周囲は約3キロで、徒歩1時間足らずで1周できます。さくら並木の美しい北堤から狭山池を眺めていると、本当に爽快な気分になるのです。

青空に 赤とんぼ 左手に 葛城・二上 奥に金剛・岩湧 手前に 狭山池

### 平成28年4月1日から平成29年3月31日までの収支決算

収入の部	
前年度繰越金	25,947
会費	604,400
寄付金 <sup>*1</sup>	53,000
雑収入	50,700
別途積立金より	250,000
合計	984,047

支出の部	
講師謝礼	110,000
年報作成費	59,292
出版書籍購入費	760,320
通信費（郵送料、振替手数料等）	102,106
事務用品費	9,064
雑費	33,764
次年度繰越金 <sup>*2</sup>	-90,499
合計	984,047

<sup>\*1</sup> 畠山悦子、白樺房子、神野武男の3氏より御寄附を頂きました。感謝申し上げます。

<sup>\*2</sup> 本年度の収支は赤字決算になりました。これは、あとがきに記した教育関係の書籍の出版によるものです。この出版は出来るだけ早く一般の人々にお読みいただきたいと役員会が判断したものであります。この赤字は当会の従来の収支状況から推して2年以内に解消できると考えています。

会計監査：会則第6条の規定に基づき平成28年度の収入及び支出に関し、決算並びに関係書類を厳正に監査した結果、いずれも適正かつ正確に処理されていることを認めます。平成29年3月31日 監査担当 澤田秀雄<sup>Ⓔ</sup> 塚本昭光<sup>Ⓔ</sup>

事務局 大阪府羽曳野市郡戸471 畑田庸雄 電話072-762-7495 E-mail [hatada@wombat.zaq.ne.jp](mailto:hatada@wombat.zaq.ne.jp)

畑田家住宅活用保存会ホームページ <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo>

会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名：畑田家住宅活用保存会)へお願いいたします。

あとがき：平成28年度も皆様のご協力のお蔭でフォーラムと一般公開を行なうことが出来ました。厚く御礼申し上げます。また、本会と畑田耕一本会事務局長が所属する豊中ロータリークラブの教育関係の活動の成果を示す書籍「双方向授業が拓く日本の教育—アクティブ・ラーニングへの期待」が大阪公立大学共同出版会から出版されました。本年報と一緒にお届けしますので、ご笑覧下さい。今後ともよろしくご支援の程お願い申し上げます。(KH)